

## 絵本と笑い・ユーモアについて

橘 玲子<sup>1)</sup>・運上 司子<sup>1)</sup>・間籐 侑<sup>1)</sup>・真壁あさみ<sup>2)</sup>  
浅田 知子<sup>3)</sup>・池宮真由美<sup>4)</sup>

- 1) 新潟青陵大学大学院
- 2) 新潟青陵大学看護福祉心理学部
- 3) 新潟市教育相談センター
- 4) 新潟青陵大学図書館

キーワード：絵本、ユーモア、笑い、臨床心理学

### A Picture Book and Humor

Reiko TACHIBANA<sup>1)</sup>, Shisako UNJO<sup>1)</sup>, Susumu MATOU<sup>1)</sup>, Asami MAKABE<sup>2)</sup>  
Tomoko ASADA<sup>3)</sup>, Mayumi IKEMIYA<sup>4)</sup>

- 1) Graduate school of Niigata Seiryō University
- 2) Niigata Seiryō University
- 3) Educational Counseling Center in Niigata City
- 4) Niigata Seiryō University Library

Key words : a picture book, laugh, humor, clinical psychology

#### はじめに

東日本大震災で被災された方が落語を聞いて本当に可笑しそうに笑っているシーンが放映され、それはとても感動的な場面であった。生活を根こそぎにされた不幸な事態にある方々へ、笑いを届けることについて落語家は逡巡したとのことである。われわれ臨床心理士は、病や不幸、対人関係に苦しみ悩んでいる方々への相談をしている際にユーモアを感じたり、笑ったりすることにどこか後ろめたさを抱くこともあるので、落語家の気持ちもわかる気がした。筆者がユーモアのことを考えてみたいと思ったきっかけは、長い間、厳しい自己批判に苦しんでいたクライアントとの面接で、暗い重いテーマが語られている流れの中でどこかユーモアを感じていて、そのことを述べたことがあった。この感じを彼に告げると、元々ひょうきんでユーモアが大好きであること、今でもテレビではお笑い番組を見ると語ってくれた。詳しいことは述べられないが、それ以後治療関係はずいぶん変化し、心理臨床活動における笑いやユーモアをもっと考えなければならぬと思っ

ていた。私たちは生きていたら解決することができない事柄を避けていくわけにはいかない。不幸な出来事や重篤な病にユーモアや笑いが不謹慎なことはいうまでもない。しかし、だからといってユーモアや笑いはいけないことであると決めてしまっているのではなかろうか。心理臨床活動とユーモアや笑いについて、もっとわれわれは心を開いておく必要があるのではないであらうか。アレン・クライン著『笑いの治療力』には、末期癌の患者や喪失体験に晒された人びとがユーモアや笑いを発見し、苦悩の中にも笑うことができること、そしてその意味について論じている。著者はこの本の中で“ユーモアは展望をもたらし、人生がバランスを失ったように見えるときも私たち自身のバランス感覚を支えてくれる” (208p) と述べ、それは決して困難な状況を解決してくれるものではないが、笑いによってその困難な状況に飲み込まれないということである。危機場面における癒す力としての笑いやユーモアが論じられ、ユーモアや笑いを発見できる力が重要であることが指摘されている。癒しという観点ではないが、外山滋比古著『ユーモアのレッスン』にも著名な人

たちのユーモア感覚が紹介されていて、その多様さに驚かされ、魂の健康さについて学ぶことができる。しかし、多くの著書に示されているように、笑いやユーモアはすべての人が受けとめるものではなくて、時には深く傷つき、痛みと悲しみとなることもよくよく心しておかなければならない。

本論文では絵本好きな仲間が絵本を楽しんで紹介しあった中から、主に絵本が発信するユーモアや笑いについてまとめたものである。このことが心理臨床活動におけるユーモア感覚を活性化し、同時に臨床心理士の魂を自由にしてくれるのではないかと期待している。

ただ、絵本の選択の問題があって、絵本の出版数は年間1500から1800冊近くも刊行されるとのことで（『新しい絵本1000』）、これまでの出版数を入れると私たちが目にして、取り上げたものはきわめて限られている。しかし、絵本の中のユーモアや笑いを取り上げたいので、ユーモアのある絵本のリストづくりではないこと、また、ユーモア感覚とか笑いも個別的で個人的なので、この感性の多様さを考えると、ここで取り上げた絵本も誰もが笑えるとは限らないことも強調しておきたい。

絵本は必ずしも子どもの読み物とは考えていないが、現実には幼児・児童が対象とされているので、笑いやユーモアと関連のある性のテーマについてはここで取り上げない。性にまつわる笑いは『日本人の笑い』で紹介されるような川柳をはじめ、神話、浮世絵など、たくさんある。老若男女、貴賤の区別なく笑うことができる世界であろう。笑うことについては同じかもしれないが、絵本の笑いやユーモアと同じかどうかについて、もう少し考えてみたい。いずれにせよこの小論は臨床心理学を生業とする仲間が絵本についての笑いとうユーモアを楽しみながら語りあった内容をもとにしてまとめたものである。

## 1. イノセント、無垢なるもの

『ふくろうくん』アーノルド・ローベル  
三木卓 訳 文化出版局  
『くまのプーさん』 A. A. ミルン  
石井桃子 訳 岩波書店

ふくろうくんは1人で住んでいて、寝ようとベッドに入ると、足の方で毛布の上にもこもこと二つの小さな山が見える。何かいると思ひ毛布をはがしても姿が見えない。何回も試しているうちに、こんな

気味悪いものが何をするかわからないから同じ部屋で眠られないと毛布を持って下に降り、部屋のソファで寝ることにする。『ふくろうくん』には5話あって、いずれも1人で大格闘する話である。同質な話に『くまのプーさん』がある。いろいろなことが起きるが、たとえばプーさんが誰か知らない人が自分たちの住んでいるところに来て、悪いことが起こるかもしれないから捕まえようとする。雪の中で足跡を見つけようとして探す、木の周りを一回りすると足跡が増えていて、何回もまわるうちに足跡がどんどん増えて、怖くなってしまふ。ふくろうくんやプーさんの行為は知能検査で高い得点を取ることにきゅうきゅうとするような、合理的で無駄をしたくない人たちには馬鹿馬鹿しいと一笑されるにちがいない。しかし子どもたちの大好きな本であるし、大人が読んでも可笑しい。おかしいけれどもかばかしいとさげすむような笑いではない。むしろほのぼのとした暖かさがある。主人公はわざとしているのではないし、一生懸命なのである。『エスプリとユーモア』で紹介されている夏目漱石の「文学評論」には“ヒューモアとは人格の根底から生ずる可笑味である・・・外の言葉で云うとヒューモアのある人の行為は他から見ると可笑しいが、当人自身では他から可笑しがられる訳がないと思っている。彼は真面目である・・・持って生まれた木地から出る”（2p）と述べられている。この定義のユーモアは絵本から受けるユーモアそのものである。

しかし、あるクライアントが『ふくろうくん』を読んで、悲しくて読めなかったと感想を漏らした。この無垢なるものについてのユーモア感覚は実は哀しみも伴っているものである。無垢なるものに限らず、ユーモアとは影に感傷や哀愁を帯びることを知っておかなければならない。

## 2. あらがえない食欲と欲望

『オオカミのごちそう』 ぶん きむらゆ  
ういち え 田島征三 偕成社 1999  
『ロージーのおさんぽ』 パット・ハッチ  
ンス 作 偕成社 1975  
『ブタヤマさんたらブタヤマさん』  
長 新太・さく 文研出版 1986

人間には抑えられない欲望がある。フロイド、Sは社会生活をするには、欲望を生のまま出したら共同社会で生活できないので、自我の統制下において、

意識から排除しなければならぬと考へた。しかし、意識はされなくとも欲望は決して消えてなくなるのではなく、人間の心の奥でいつも機会があればたがっているというのである。この食欲などの欲望をめぐる絵本はたくさんあるが、特にこの3冊を紹介したい。

腹ぺこのオオカミが子ぶたを見つけ、つかまえるその瞬間に切り株につまずいたために逃がしてしまった。「逃がした魚は大きい」のごとく、おいしそうな子ぶただったのにと悔しくてしょうがない。オオカミはいつもなら食べる鶏やいろいろな動物がいても目もくれず、おいしそうな子ぶたを追いかける。オオカミの頭の中では子ぶたはますます大きく、まるまると太ってくる。実際に子ぶたをつかまえたにもかかわらず、こんなんじゃない、危うく食っちゃまうところだったと本物の子ぶたを置いていく。オオカミの頭の中の子ぶたを吹き出しで描いてあって、ページを繰るごとに子ぶたはまるまると大きくなっていくが、それに反してオオカミが針金のように細くなっていくという話である。願望だけがリアルになると現実の子ぶたととはすっかり違うものになってしまうのが『オオカミのごちそう』である。

めんどりのロージーはすまして農場を散歩する。後ろからそれを食べようと狙って狐がついてくる。ロージーは狐にまったく気がつかないが、食べる機会を狙って後を付けていく狐は、顔を打ったり、池に落ちたり、蜂にまで追っかけられる。何も気がつかずすまして歩くロージーとめんどりを食べたいがために艱難辛苦にあえぐ狐の対比が何ともおかしい。食欲という限りない欲望には勝てないところに喜劇と悲劇が同時に生ずるのであろう。『オオカミのごちそう』は幻想が大きくなるが、『ロージーのおさんぽ』の狐は痛い眼にあいながらも食べたいものに執着している可笑しさである。

『ブタヤマさんたらブタヤマさん』のブタヤマさんは蝶を追いかけるのに夢中すぎて、後ろからお化けが追いかけてきて、「ブタヤマさんたら ブタヤマさん うしろみてよ ブタヤマさん」と呼びかけられても気がつかない。時々呼ばれている声に気がつき「なあに どうしたの なにか ごよう」と振り向くと何もいない。読者は後ろに怖いものが迫っていることを知っているのだから、はらはらしているが、知らないのはブタヤマさんだけ。後ろにいるのは大きな蟬とか青虫とかお化け、蛇や蛙などが数ミリの近くに来て、ぺろりと食べそうである。「蝶を

追いかけるときではありませんよ、後ろもちゃんと見て！ 何かがいますよ」と、ひとつの好きなことだけに思いをはせていると、怖いことがおきると呼びかけられている。長新太のブタヤマさんシリーズにはこの作品のほかにやはり食欲に勝てないブタヤマさんが出てくる。特にキャベツを食べたくて仕方がないが、食べることができなくて、このキャベツくんととのやり取りがおかしい（『ブタヤマさんとキャベツくん』）。プーさんも蜂蜜の魅力には抗えず、おかしいことになってしまう。なんといつても食欲は生き物の最も原始的な欲求であって、我慢したりコントロールすることは難しく、我慢の仕方に悪戦苦闘する態度にわれわれも共感するのである。

欲望の塊のようなオオカミやぶたの姿は、われわれ人間にとって自分の中にこのような欲望に振り回される姿を認めないわけにはいかない。こんな自分に直面するのは居心地が悪いが、オオカミやブタヤマさんが身代わりになってくれるので、抗えない欲望を笑うことができるともいえる。自分の愚かさを否定はしないで笑えるのである。受け入れながら笑い、人間みんなおなじじというようにある種の共感をよび、自分だけ特別だとか自分だけ醜いとか思わないという点で精神の健康さとして笑いを考えることができよう。

また、ブタヤマさんという名称もおもしろい。私たちがイメージするぶたは仕事人や努力家、まじめ、きれい好きなど合理的で清潔感を重視する現代のイメージとは程遠い。しかし、最近ぶたのキャラクターがはやっていることは、何か息が詰まるような清潔感を追求する現代社会の雰囲気を変えることができそうな、ちょっとしたふざげとかおどけがぶたに託されているのではないだろうか。ところで、絵本はぶたではなく、ブタヤマさんなのである。顔はぶたであるが格好は人間で、ぶたに近いがぶたではなく、人間みたいだが人間ではないというところに自分みたいだが自分と同じではないという点で対象化しやすく、そこで笑える。ユーモア感覚とは河合（2006）の言うように対象化はするが、客観化とは違って、このときに生ずるのは人間への暖かみなのではなかろうか。『エスプリとユーモア』には福原麟太郎のユーモアに関して“憐れむべき人間の姿は諸行無常であって、この諸行無常の笑いをヒューマという。それは価値の転換であって、現実からの転身で・・人情的な処世観である”（3p）と述べているが、欲望という自然現象を笑うこと、このユーモ

ア感覚は自分の姿を笑い、同時にみんなとほどほど仲よくいる処世観でもある。

### 3. 強きものと弱きもの：強きがからかわれる

『じごくのそうべえ』 田島征彦 作

童心社 1978

『じごくのラーメンヤ』 荻田澄子 作

西村繁男 絵 教育画劇 2010

『王さまと九人のきょうだい』 君島久子

訳 赤羽末吉 絵 岩波書店 1969

『ゆらゆらばしのうえで』 きむらゆういち

作 はたこうしろう 絵 福音館書店 2003

『ふたり』 瀬川康男さく 富山房 1981

上方落語「地獄八景」の中から、田島が型染めで表現した色彩豊かで、底抜けにおもしろい絵本が『じごくのそうべえ』である。軽業師と歯医者と医者と山伏の4人が地獄行きで一緒になる。閻魔さんから次々に刑罰を受けるが、そのたびに鬼がやられたり糞尿地獄や針の山がめっちゃめっちゃにやられてしまう。歯医者は地獄の鬼の歯を虫歯と称して全部抜いたり、医者は飲み込まれた鬼の身体の中で笑い玉をこそばかしたり、くしゃみのひもを引っ張ったり、へこきの袋をけったり。軽業師は針の山、山伏は地獄の釜と、地獄の処刑場を大いに荒らしまわるので、閻魔さんに地獄から追い返された。このため生死をさまよっていた4人はこの世に生き返る話である。圧倒的な強さを持っている閻魔さんは罪人たちにやられるが、絵で表現されるやられ方は何回見ても笑ってしまう。落語によって可笑しさのエッセンスが磨かれて残ってきた話題だけにただ笑える。文章の関西弁もおかしさ倍増である。なお、落語を題にした絵本が数冊でているが、どの本も大いに笑える。同じ地獄が舞台の『じごくのラーメンヤ』は、ラーメンという庶民的で日本の国民的な食べ物によって、地獄が大いに変わってしまう話である。天国に地獄で作るラーメンのおいしいそうな匂いが上ってくるので、極楽の住人たちが出前を頼むことになる。そのあまりの人気に、地獄の住人たちがラーメン作りに忙しくなったので、針の山はさびつくし、地獄の釜は火をたかなくなったので程よいお風呂になって、誰も地獄から逃げだしたいとは思わなくなった。ほのほのと可笑しいが『じごくのそうべえ』ほどインパクトがなく、やはり物語には地獄

はあってほしいと思ってしまう。

『王さまと九人のきょうだい』は中国の民話で、中国には類話がたくさんあるのだそうである。物語はイ族の老夫婦が子どもを欲しがっていて、ある時老人からもらった丸薬で9人の子どもが産まれた。老人は名前を「ちからもち」「くいしんぼう」「はらいっぱい」「ぶってくれ」「みずくぐり」などなど、とにかく傑作な名前を9人の兄弟に付けるようにと告げて去る。やがて王様の住んでいる宮殿の最も大切な大きな柱が倒れてしまって、それを聞いた9人の1人、「ちからもち」が夜中に行きつて元に戻ってしまう。王様はこんな力持ちを信じられないので、確かめるために無理難題を出す。次々にそれぞれの名前に沿って兄弟たちが解決する。9人はみんな同じ顔立ちなので、王様は1人だと思ひこんで、こんな強いやつが現れたら王である自分もやられると思ひこみ、イライラとして眠れなくなってしまふ。とうとう9人目の兄弟が王様を水で吹き飛ばしてしまひ、それから後には村人たちは平和に暮らすという話。城の屋台骨が折れてしまひ、この王国も終わりに近づいていることが推測されるが、9人を一人と見てしまひて恐れ、結果として王様の敗北となる。名前と同じ力ととんちで困難を乗り切ることには痛快さがある。訳者の君島によると、イ族は悲惨な歴史を生きた少数民族であることが紹介されている。赤羽もそれを知って絵を描いているが、明るさとたくまさが民族の持っている力であると理解して、技巧ぶらず、漫画ふうにおもしろさを描いたと述べている。豪快でおかしい笑いは、悲惨な生活をしていても魂は自由で笑いあうことができるということでもあろう。笑い飛ばすという表現があるが、悲惨な生活を見捨てるというような意味ではなく、魂を自由にすることによって、人間に活力をもたらすと言えるように思う。東日本の大震災の辛い中で、落語を聞いて本当におかしそうに笑っていたお年寄りの顔もそういったことなのではなかろうか。

1本の丸太橋の上に、ウサギが駆け込み、それを追ってきた狐が橋に飛び乗った。狐はこれでウサギを食べられるとにんまりしたその時、丸太橋は土手から離れ、橋桁に漸く支えられて、2匹はシーソー状態になってしまう。どっちかが勝手に動いたら2匹とも川におっこちて助からない。敵と味方であるが、何とかバランスをとってゆらゆらしないように協力して位置を決めないと危険である。食べるよりも命の方が大切になる。日が暮れて、夜中、この天

秤状態でお互いが自分のことを語り始める。これまでの敵味方という関係は危機状況に陥ることで対等になり、お互いを知るようになる。この間にいろいろあるが、二匹は無事に陸について喜び合った途端、狐の目がぎらりと光り、察知したウサギは急いで逃げる。危機状況を抜けたら、そんなに簡単に平和な仲のよい関係になるとは限らないが、狐はゆっくりおしっこをしながら「捕まるなよ」とつぶやく。本当は笑える状況ではないが、動くことができなく何もできないときに自分を語り合うことで、そこに生まれる新しい関係が可笑しいのである。ここでは対等になるくらい気持ちが通じ合ったとしても、敵味方の関係も消えた訳ではない。気持ちが通じたからといって、ずっとぴったり仲良くなるというほど対人関係は単純でハッピーとは限らない。しかし、単に敵と味方だけの関係とは違ってくる。木村祐一という作家は多様なテーマを絵本に持ち込んでいる作家であるが、『ゆらゆらばしのうえで』のほかにも『あらしのよるに』シリーズも危機場面での出会い方がなんともユーモラスである。いずれも食う・食われる関係なのに助かるために議論したり、時に自分のことを語り合い、信頼感を抱く。人と人との関係を「笑い」から考える際に、いろいろと教えてくれる絵本でもある。危機場面や闇のなかでないと、心を開いて語り合うのが難しいということにも、教わる場所がある。カウンセリングを始めるとすべて本当のことを語れるかというそう単純でないことに通ずる。

『ふたり』はネコとネズミの関係を3文字で表しているまことに面白い絵本である。逃げるネズミと追いかけるネコの動作は1頁ごとに、にやり、きらり、ばさり、にたり、ひらり、とぶり、どぶり、まだまだ続いて最後に「ふたり」で終わる。ねことネズミの関係をこの言葉によって動きが想像できるであろうか。関係をこれだけ単純化して示されると、言葉のおもしろさと絵のおかしさと抑えられている色調で、つい心理療法でもこんなことが起きてくると連想されて、身につまされ可笑しくなる。とにかく素敵でおかしいのである。こんな絵本があると絵本は子どものものと決めつけるのはもったいないと、つくづく思うのである。大人たちにとっても元気がなくなると、めくっていると笑ってしまって、笑いは人間に新しいエネルギーをもたらす事を実感できる。この絵本は単純にして、絵があるから可笑しいという文と絵との本当に統合された絵本である。

ここまで取り上げた絵本は、食うか食われるかという関係の中で、弱い立場のものが圧倒的に強い立場のものを、頓知やアイデアでやっつけたり、危機場面で関係が変わったり、一杯食わせたりするような展開の中にユーモアが生まれることを示唆する。これまでの強弱の関係が変わる時、その変わり方が笑いを誘うのである。立場が逆転するのは大人にかなわない子どもと強い大人との関係を想像したら、子どもは開放感と爽快感で楽しくなるし、一方大人にとっても我慢しなければならない上司や同僚などの関係を考えると、強いものをやりこめていると空想しただけですとす。勝ちもしなくても笑い飛ばせたら爽快である。スポーツなども負ける方に同一化して、いつも負ける球団がたまに勝つと、やった!と思う。「判官びいき」といわれるような心理も関係がある。マルセル・パニョル(1953)によると笑いの原因の一つは社会的な身分の相違の間に生ずると指摘しているが、有名な人とお金持ちの人と名もなく貧しい人という関係のなかで、笑いが生ずるということであろう。そして、笑いが生じ、外山(2003)がいう「笑いが生ずるときには関係をみる視点が変わってくる」ということになる。このとき、木村祐一の絵本のようにぎりぎりの危機状況の際に生ずる関係の変化は、関係の多様性ではあっても必ずしもハッピーとは限らないというところが臨床心理学などを学んでいると同意できるのである。新しい関係を生きようとしたらとても大変な課題を生きることになることもある(きむらゆういち『あらしのあとに』参照)。ただ笑いやユーモアが生まれることが魂の自由さに通ずること、『ふたり』のような関係に生きられたらと思ったりする。明日は再び、にやり、ばさり、どぶりなどとなるかもしれないが。

#### 4. 友だち 嫌いで、でも好き

『ふたりはいっしょ』 アーノルド・ローベル 文化出版局 1972

『ゆうたはともだち』 きたやま ようこ 作 あかね書房 1988

『ともだちや』 内田麟太郎 作

降矢なな 絵 偕成社 1998

『ねえ、どれがいい?』 ジョン・バーニンガム さく 評論社 2010

ローベルの「かえるとがま」くんシリーズは、多

くに人々に愛されている絵本であるが、とりわけ優しい関係の中にあるおかしさを表現しているのが『ふたりはいっしょ』である。この本には、「よていひょう」「はやくめをだせ」「クッキー」「こわくないやい」「がまくんのゆめ」と5編が収められている。なかでも、クッキーを作ってかえるくんががまくんが食べる話は、おいしくて食べるのをやめられない話で、食べるのを止めると意志力がつく懸念に努力をするが、そのやり方が涙ぐましい。結局、クッキーを全部捨てて僕たちはたくさん意志力ができたとかえるくん。しかし、がまくんは「ほく意志力なんていない」といい残して、またクッキーを作ることになる。小型で絵も地味であるが、この絵本を見てまじめになろうとするくらい難しいことはないことを知る。ローベル自身は不幸な子供時代を過ごしたと紹介されているが、不幸や悲しみの中から生まれるユーモアや笑いは濾過されたおいしい水のような力を備えているのかもしれない。笑いとほろ酔いという性質も持っているとも言えよう。

「ゆうたくんちのいばりいぬ」シリーズ中の一冊『ゆうたはともだち』を取り上げる。シベリアンハスキーのじんべいは、はじめのページで「おれ いぬ」、次の頁には「おまえ にんげん」とゆうたを紹介する。犬と人間の比較が簡潔な言葉で比較される。「おまえなでる、おれなめる」とか、「おまえすぐなく、おれかながえる」などなど。この最初の頁でまだ何も起きていないのになんともおかしい。このことばとりズムも笑いと関係があるようだ。つぎつぎと犬と人間の違いが簡潔な言葉と絵で示される。あまりに本当だとおかしくなる。また対比の仕方が、「おれ」「おまえ」という呼び名なので、まじめな親にとっては渋い顔で読むかもしれないが、可笑しさのひとつは「真面目」でないところに快感があって、可笑しさとは真面目さと微妙な許容範囲内で成り立っている。うんこやしっこを扱うような感じと似ている。しかし最後がいい。「全然違うけど、でも好き。だからともだち。」で終わる。大切なことはちょっとくらい眉を潜めても、ちょっとくらい意地悪であっても、好きという感情に支えられた信頼関係が笑いを許容するのではなかろうか。そうでなければ笑いは卑下や見下すような関係に陥ってしまう。犬と人間という抽象化された関係ではなく「じんべい」と「ゆうた」という固有な関係のなかで、対比のおかしさ、そして絵本でなければ伝えることが難しい力を感じさせる。ユーモアあり、愛

があり、人間の基本的な信頼を絵本は簡潔に伝えてくれる。信頼とは不思議な関係なのである。そこで笑いが共有できるなら、窮屈でない信頼で、それこそ人々は求めてやまない絆となろう。

『ともだちや』も内田、降矢のコンビで描かれているシリーズ物である。キツネは「ともだちや」を開店することにした。1時間100円で寂しい人に友達になってあげるとのぼりを立てて売り歩く。熊はイチゴを食べる相手に買ってくれた。「友達なんだからさんではない」といわれ、おそろおそろ熊と呼び捨てにする。2時間200円もらった。今度はオオカミが呼び止めトランプを一緒にする。キツネはお代をいただいてないとおそろおそろ言う、オオカミは歯をかちかちいわせて怒りながら、本当の友達なんだという。キツネはそうっと手を引っ込め、「明日も来ていいの」と聞くと、「あさってもな」という返事。ワインとソーセージを囲んで食事しながら、オオカミは大切にしているミニカーをくれた。キツネは「友達はいいませんか、寂しい人はいませんか、何時間でもただです」とスキップしながら帰っていく。友達を本当に欲しかったのはキツネだったのである。このともだちシリーズは何冊かあって、孤独な現代をキツネに託した絵本。この絵本では怖い熊と怖いオオカミにおどおどしながら「ともだちや」でお金をもらうという発想が新鮮であるが、キツネの寂しさがわかるとその行動にユーモアが感じられる。ここには上げなかったが、一人が一番いいといながら友達を持ったことのないオオカミの話がある(きむらゆういち作、田島政三絵『おおかみのともだち』)。熊と付き合いながら、自分がいつ騙されるかびくびくするオオカミ。だんだんそうではない事に気がつき、「これが友だちなのかなあ」と自問するオオカミが素敵なのである。

『ねえ、どれがいい?』はちょっと異質な絵本である。この絵本のような遊びができる関係はよほど安心した関係でないと成り立たないという意味で、ここに挙げた。大型絵本で、出版されたのはごく最近であるが、発表されたのは30年前のものである。まず、本を開けると、「もしもだよ、」と犬をつれている少年が問われる。ページを繰ると、次々と嫌な場面が出てきて、「どれがいい?」と尋ねられるのである。見開きいっぱい数コマが描かれるが、どれも「えーっ」といいたくなる、ありえないような嫌な場面ばかりである。たとえば、「どれがいい? 2000えんで イバラにとびこむのと、10000

えんで かえるをのみこむのと、20000えんで おばけやしきにとまるのと。どっちがいい?」「とうさんが がっこうでおどるのと、かあさんが きっさてんでどなるのと、どっちがいい?」などなどが選択肢になる。パーニンガムの絵はソフトタッチで、どの場面も選びたくはないが、嫌な場面はこれでもかといいたくなるほど続くと、笑ってしまう。絵本の最後は「そんなことより、もしかしてほんとうは、もうじぶんのベッドでねむりたい?」で、安らかな寝顔でおしまいになる。困ることとか嫌なことはそのとき決して楽しいわけではないのだが、しかし日常生活には避けられないことでもある。それを笑い飛ばせることができたならそれもすごいことになる。アレン・クラインがそのときは苦しくても後で思い出す時には笑ってしまうことが多いと指摘しているが、後になるとつき放せることから、笑いが出てきて、「嫌になっちゃうよね」といいながら笑ってしまうのである。

## 5. タブーに触れるスリル

『みんなうんち』 五味太郎 作 福音館書店 1981

『うんちしたのはだれよ』 ヴェルナー・ホルツヴァルト 文 ヴォルフ・エールブルック 絵 偕成社 1993

『うんちっち』 ステファニー・ブレイク 作 あすなろ書房 2011

4-5歳くらいの子どもたちはうんこ、おしっこ、おなら、おしり、おっぱいが大好きである。大人たちが使ってはいけな言葉を使いたがる時期で、子どものおどけやふざけと関連する。しかしこの時期は平井、山田(1989)によるとそう長くは続かない。絵本にもこのようなテーマが結構多いが、『みんなうんち』は五味太郎が子どものために堂々と楽しんでよい絵本を作ってくれた「かがくのとも傑作集」の一冊である。大きい象のうんち、小さいネズミのうんち、虫や生き物のうんちの形と色。いろいろな動物の後姿とそのうんち、見開きいっぱい壮観である。「いきものはたべるから、みんなうんちするんだね」と大切なことも述べて、大人もこんなに堂々とやられると笑ってしまう。東日本大震災で絵本の読み聞かせをしたが、この本は大人気であった。

『うんちしたのはだれよ』は、頭の上にもうんちを

落とされたモグラが犯人探しを必死にするお話である。動物のうんちの形や特徴など、先の『みんなうんち』と似ているが、犯人の犬をようやく見つけて仕返しをして満足するのと、仕返しされた犬にとっては塵のようなモグラのうんちの反応のずれが可笑しい。モグラにとってはいのちを賭けるくらいの仕返しであるが、当の犬にとっては「あれ、なに?」なのである。相手に通じない仕返しであっても、モグラのプライドがある。モグラには悪いがモグラの大真面目さと犬のあれ!というズレがおかしくなる。

うんちっちとしか言わないウサギの子は、オオカミのおなかに飲み込まれて、オオカミの代わりにうんちっちと答える。ウサギの子どもの父親はオオカミの開腹手術をする。うんちっちと父親が呼ぶと、「おとうさんったら なににっているの?ほくはシモンだよ。」という。おとなはうんちっちと決めて呼んだら、子どもにとってはもううんちっちではないようだ。いつまでもうんちっちではない。使ってはいけな言葉を使いながら大人の反応を見て、スリルを味わっているようである。ユーモア感覚とスリルを伴う遊び感覚とは切り離せないようである。

## 6. 言葉の魔力

『ことばあそびうた』 谷川俊太郎 詩 瀬川康男 絵 福音館書店 1973

『ふるやのもり』 ぶん いまえよしとも え まつやまふみお ポプラ社 1967

『おんちよろきょう』 小暮正夫 ぶん 梶山俊夫 え ほるぶ出版 1985

『おじさんのかさ』 佐野洋子作・絵 講談社 1992

『なむチンカラトラヤヤー』 多田ちとせ ぶん 太田大八 え ほるぶ出版1985

『ことばあそびうた』はさしづめ日本版マザーグースのような絵本である。言葉、音、意味の展開、びっくり、可笑しくなって感心する。例を挙げると、「たそがれ」では次のようになる。

たそがれくさかれ

ほしひかれ

よかれあしかれ

せがれをしかれ

そしてこういう詩に瀬川康男の絵がつくのだからすごい本である。元気がないときに見たら、可笑しくなって元気が出る。差別用語と目くじらを立てず

に、言葉の不思議と可笑しさに身を任せることができる本である。絵本好きには女性が多いように思うが、こんな本は男性も女性も楽しむことができるであろう。言葉遊びが、どんな世界を展開してくれるか、ユーモアの宝庫のような本である。

『ふるやのもり』は昔話で、老夫婦の家には立派な馬が飼われていたので、馬を欲しくてたまらない馬泥棒と馬を食べたいオオカミが馬屋に入り込んで、チャンスを狙っていた。老夫婦は孫に尋ねられて一番怖いものに「ふるやのもり」があると話していて、それを一人と一匹が聞いていた。どちらもその正体がわからないでいると、今夜あたり来るとじさまが言う。オオカミも馬泥棒も震え上がってしまう。怖がって震える馬泥棒はオオカミの上にとたりと落ちてしまう。オオカミはこれぞ「ふるやのもり」と思い、馬泥棒も逃げる背中にしっかりつかまってこれが「ふるやのもり」だと思う。「ふるやのもり」とは古い屋敷なのでみずもりが怖いということであったが、意味の取り違いで恐怖に襲われたまま繰り返す可笑しさである。『おんちよろきょう』も昔話で、お経の読めない小坊主がおばあさんの願いで経を読むことになったが、読めないと断れない。思案の末、壁の破れ穴からのぞくネズミがいたので、ネズミのしぐさをお経調で読み始めた。「おんちよろちよろ なにやら 一びき あなのぞき はじめて そろろう〜」、今度は二ひきがのぞき はじめたので、それをお経にして続けた。最後に「おんちよろちよろ あわてて こそこそにげだし そろろう。なにもとらずに にげだしそろろう。チーン、おしまい。」となった。おばあさんは毎晩このお経を読んでいて、あるとき二人の泥棒が入ろうとすると、このお経が聞こえ、自分たちが知られてしまっていると思い逃げるといふ話である。こういった偶然に起きる思い違いの可笑しさは結構昔話に見られていて、この可笑しさは昔話のすごい力だと改めて思う。このお経の変さにはまったく気がつかないおばあさんもすごい。泥棒とお経の偶然の一致が危機を逃れる結果になるのであるが、ユングの言う共時性とも理解される。

『なむチンカラトラヤーヤ』は敗れ寺に和尚さんと猫がすんでいた。猫は夜中になると集まってお経を唱える場所に、和尚さんの袈裟を着て出かけていた。それがばれて、別にお坊さまから叱られたわけでもないが、猫は申し訳なく思い姿を消した。そのとき和尚さんに何か困ることがあったら私を呼んで

ほしいと言いついて残して去る。この和尚さんは仕事を真面目にしないでむしろ怠けているように生きているので、誰からも頼りにされているわけではなかった。ある時、長者さまがなくなり盛大な葬儀がいとなまれたが、棺が宙に浮かんだままになってしまって、偉い坊様でも降ろすことができない。敗れ寺の和尚さんが呼ばれ、「なむチンカラトラヤーヤ」と経をあげると棺が下りて、それ以後は寺が大繁盛するという話である。話も面白いが、「なむチンカラトラヤーヤ」という音が気に入って、時々唱えてみると気分がいいのである。誰もが面白がるとは言えないであろうが、こういうこともおきうと思つて唱えてみたら結構面白い。リズムも変えて唱えてみるのもよい。『おじさんのかさ』（佐野洋子著）も大切な傘をささないで持っているおじさんが、子どもたちが雨の中を傘を差して歌いながら歩く音を聞いて、「ほんとかなあ」とつぶやくことから、雨の中でかささをさしてみる。口ひげを生やしたおじさんがほんとうかなあ疑問に思う瞬間が、展開点になるわけである。ぬれた傘もいいもんだなあと感じ、奥さんは雨が降っているのに傘をさしたんですかと驚く。

このような言葉とリズムは日常的な言葉ではなく、あまり意味はないがリズムがあって、活力が感じられ「ごろあわせ」が力を持っているように思う。このように言葉を聴いたり言ったりしてみたら日常性のちょっと裏側が見えてそれがユーモア感覚を刺激するのではなからうか。

## おわりに

河合（2006）は、笑いには快感という感情が伴い、必ずしも快感だけとは言えないが、しかし感情体験であることには間違いないという。そして、笑うことができるのは他者とか自分を突き放して見ていることで、ある種の対象化が必要であるから、対象化によって余裕が生まれ、その結果、新しい視点が開け、可能性が開かれると述べている。そして、世界中から読まれている『ピーナッツ』について谷川との対談では、スヌーピーやチャーリーブラウン、その他のキャラクターについて笑いの多様性を論じている。この指摘は今回とりあげた絵本における笑いにも共通するところが多い。

絵本には読み手の笑える力がどう関与するかが重要である。この読み手のユーモアを感知する能力に



ついで、外山はイギリスの辞書（OED）から説明し、ユーモアを発する側だけではなく、受け取る側の心理作用として考えている。この考えにはパニョル（1953）も「自然界には笑いの源泉はない。喜劇的なものの源泉は笑い手の中にある」と述べている。ユーモアは単におもしろいかおかしいというだけではなく、さまざまな感情を伴っていて、時として哀愁や感傷を感知するが、笑いという感覚によって新しい視野に立てるということである。確かに近年、笑うという行動が脳科学上においても快感情を賦活するという知見はたくさん出ている（『笑いの治癒力』『笑いとお癒力』から）。ユーモア感覚と笑いは多様な感情が呼び覚まされるという点でも人間の本性に訴えるものである。絵本がファンタジーや日常性を超えて経験できる世界に子どもが触れることができるのは、子どもの成長にどんなに有益であるかは改めて言うまでもない。大人にとってもそうであって、ノーマン・カズンズ（1997）は高等な精神機能とリンクしている笑いのプログラムが働いて笑いが起きるとし、体のプログラムが円滑に作動して、日々の生活になると述べるが、ここで笑いを創造しなければならぬとも指摘し、ユーモア感覚を磨くことも薦めている。

私たちは対人関係で笑ったりユーモアを感じ取ったりしながら活力を得たりストレスから開放されたり、生き生きと生きる力をもらったりしている。しかし、目の前の人をストレートに笑うことは関係を壊したり傷つけたりする危険性もあることはいろいろな研究者からも指摘されているとおりで、安心した関係のなかで笑いあうのである。対人関係をスムーズにするために川柳やことわざもそうであるが、笑いの文化をそれぞれの民族や地域の人が創り出してきている。落語や漫才などの話芸もそうであるし、演劇にもそれがある。絵本はそういった意味で子どもにやはり笑いを提供するはずである。そして大人も楽しむ。

絵本には絵の重要性を強調しておかなければならない。ここで取り上げたいずれの本も絵があつて、笑いやユーモアが感じられることが大きい。そしてユーモアや笑いは日常生活の中であふれんばかりにあるものではなく、チラッとあるから笑いになる。いつも笑っていたらそれこそ日常性からの乖離がありすぎて、日常生活ができなくなるであろう。絵本はこの笑いの世界も見せ方がうまく構成されている。絵本を開いて、そして終わりにになると絵本を閉

じる。開いて、閉じるという行為が笑いやユーモアを際立たせてくれる舞台でもあり、臨床心理学で言う枠という考え方にも通じていると思われる。

最後にマルセル・パニョルの笑いについて「何を笑うかによって、その人柄がわかる」と述べているが、これは夏目漱石のユーモアとはその人の木地から生ずるとのことあわせて考えると、笑う人も笑われる人も知性や観念ではなくその人の無意識も深くかかわる生の力なのではないかと思うのである。真面目とか正義は人間の重要な倫理観ではあるが、そのみを強調すると正しいだけにむしろ硬直した精神へと陥る危険性がある。笑いやユーモアからは精神の自由さや余裕、柔軟さをもたらされることで個人だけではなく、社会にも新しい力となっていくのではないかと考えている。

#### 参考文献

- アレン・クライン（1997）：『笑いの治癒力Ⅰ・Ⅱ』創元社  
 河合隼雄（2006）：『対話する生と死 ユング心理学の視点』大和書房、64～80  
 河合隼雄＋谷川俊太郎（2004）：『誰だってちょっと落ちこぼれ』講談社  
 河盛好蔵（1969）：『エスプリとユーモア』岩波新書730  
 「この本読んで」編集部（2009）『新しい絵本 1000』メデアパル 23  
 外山滋比古（2003）：『ユーモアのレッスン』中公新書 820  
 ノーマン・カズンズ（1997）：『笑いとお癒力』岩波書店  
 平井信義・山田まり子（1989）：『子どものユーモア おどけ・ふざけの心理』創元社、68～150  
 マルセル・パニョル（1953）：『笑いについて』（鈴木力衛訳）岩波新書 8  
 暉峻康隆（2002）：『日本人の笑い』みすず書房